

はじめに「環境への強度性の回復」

国際哲学センター（「エコ・フィロソフィ」学際研究イニシアティブ）
センター長 河本英夫

2020年は、新型コロナ一色に生活環境が染まった一年であった。生活のモードも、環境のモードも、前年までとは様相を一変させた。普通にただ散歩することもできず、リックスして電車に乗ることもできない。確実にごく普通の日常が失われたのである。ウイルスに感染した際の医学的な初期治療の対応指針は、大まかには固まりつつある。だが生活環境内に存在するコロナウイルスの出現可能性は、北半球が冬場になって、予想を超えて高まり、しかもウイルスの変異株は、いく種類も報告される場面に来ている。

環境内からこのウイルスが消滅することはほとんど可能性のないことなので、ウイルスの出現可能性のある環境で、生きていくよりないのが実情である。「コロナとともに」あるいは「ウイズ・コロナ」という言葉そのものは、言語明瞭、意味不明瞭の典型的な語である。「コロナとともに」とはいったいどう生活することなのか。環境そのものの生存リスクが高まり、そうした環境内で生活していく以外にはないのであれば、何らかの指針が必要となる。三密の回避、マスク、手洗いは、基本的な予防指針である。

だがそれを守れば、感染が完全に防げるわけではない。PCR検査で陰性判定がでたとしても、それが検査誤差による偽陰性かもしれない。かりに陰性だとして、翌日は陽性になるかもしれない。

すべてのデータには、不確実性が含まれる。データそのものが当てにならないわけではない。データには誤差が含まれ、また昨日のデータは今日の現実を保証するものではなく、さらに統計的マクロデータが、自分の身に降りかかりうることだと言う現実感、最初から確率的偶然を含んでいる。どのように詳細な情報が流されようが、二度、三度と何も起こらなければ、個々人にとってやがてその情報は無視される。韓国のK防疫情報には、判明した陽性者の歩いたところ、立ち寄った場所の詳細な経路が表示される。だがすべての場所が危険なわけではない。日中、日の当たるような場所は、ウイルス一般の特性として、紫外線に当たれば短時間でウイルスそのものが壊れてしまう。空気の通り過ぎる空間は、感染の起きるウイルス密度に至る以前に、ウイルスは散逸してしまう。情報一般にはただちに慣れて、多くの人たちは見てすぐ忘れる。津波警報が出され、何も起きないことが2、3度続けば、情報による警報の現実感には、瞬く間に変化が生じる。

危険性はデータによってあたえられてはじめて判明するものではない。込み入った食堂で食事をするとき、窓際の少しだけ窓の空いた場所、おしゃべりをしている人たちからは十分に距離の取れる場所を選ぶことができる。日中であれば、できるだけ日の当たる場所を選ぶ。リスクは、そのつどの個

体に成立する。情報は、いつでも粗い手掛かりにしかならない。情報がリスクの度合いを各個体に通知するわけではない。感染は各個体に起きることであり、治療も各個体に必要とされることである。同じ場所において、友人は感染していないのに、自分だけが感染したということが起きる。感染者を自称するやけを起こした男と一緒にカラオケをやっても感染しない場合もあれば、この男の座ったソファで時間をかけて化粧直しをして感染したホステスの事例もある。個体差は、つねに含まれている。リスクの度合いは個体ごとに異なり、リスク潜在性は、個体の固有性(免疫力の高さ)と、その日の体調と、消すことのできない偶然によって決まってくる。高齢者は重症化しやすく、若者は無症状に留まることが多い。これは傾向として事実であるが、ウイルスが身体の中のどの部位に感染するか大幅に依存する。咽頭付近にウイルスが付着する限り、高齢者であっても軽症で終わり、肺の奥の肺胞に付着すれば、若者であっても重度の肺炎となる。

リスクの度合いは、各個体にとって感じ取られている環境である。このリスクの度合いこそ、環境に感じ取られている「強度性」である。生活するものの基本的な能力こそ、この強度への感度である。情報は粗い手掛かりにはなるが、強度を置き代えるほどの能力はない。

また情報は、基本性格として Yes, No やオン、オフという二者択一の性格をもつ。これらは現実のなかでは、ほとんど成り立たない「排中律」の世界である。現実のなかでは、こうした二者択一は、起こりようがない。完全に安全と完全に危険、リスク0とリスク1は、どこにもないエクストラの現実である。それが情報である。

たとえワクチンが摂取されてもこの事態には大きな変化はない。ワクチンを接種すれば、問題はすべて解決という仕組みにはなっていない。形成される抗体の維持期間の問題があり、またすでに体内で抗体が形成されている場合には、ワクチンに対してどのようにこの抗体が反応するのかは、未定であり、不明な部分も多い。RNA ウイルスは、比較的変異が速く、変異の幅がワクチンの対応範囲に収まるのかどうか未定である。確定されたオン、オフは存在せず、つねにリスクの度合いを感じ取らなければならない。

言語は、肯定形と否定形の二者択一になる仕組みを導入している。そのため強度への感度はかなり鈍ってしまった。言葉で何かを言えば分かった気になれるもの、言葉が現実をつねに歪めていることになまったく気づかないもの、言葉によって現実性が硬直化するもののように、情報と言葉による強度への不透明な侵襲がある。ある意味で強度性への感度を回復するためには、情報や言葉をひととき括弧入れする必要もある。リスクの度合いは、そのつど変化している。情報や言葉は、強度性へと向けた経験の二次的な勘違いになってしまう。

私が毎日の散歩道にしているコースの一部に、川土手がある。陽が燦燦と降り注ぐような日には、陽にあたったほうが良い。そんなときはマスクも不要である。多くの者たちは、そんな場所ではマスクはしない。すれ違う散歩者のなかに、奇妙な人物がいる。マスクをしていないものを見かけると、慌てて顔を背け背を向けてすれ違う時間をやり過ごす。冬場なのに、散歩もサンダルで、靴下も吐いていない。別のところに力が入ってしまっている。一日の全エネルギーをこの朝の散歩で使い切って

しまうように全身に緊張が漲っている。強度の感じ取りは、あらかじめ設定した指針とも方針とも異なる。こうした人物は、おそらくウイルス感染回避のための自分の指針を、言葉で雄弁に説明するのである。雄弁な言葉での説明のために、全身が硬直し、強張っている。何か筋が違ふと感じられる。岩崎大研究支援者のいう「あいつ系」の人物のようである。強度の感じ取りには、自在さが必要である。

今回のウイルスの難しい点は、無症状感染者(医学的には病人ではない)が、周囲への感染能力をもったまま市中にいる可能性である。しかも夥しくいると考えなければならない。従来までのリスク感性では、これらを感じ取ることはできない。新しいタイプのリスクが、市中に蔓延していると考えざるをえない。この新たな局面があるために、新型コロナは難しいウイルスになっている。

環境の変動にも感度が必要となる。社会内のウイルス濃度や拡散の度合いは感じ取りにくい。新規感染者の数値が毎日更新され、この数値の変動のなかに、極端な変化が出れば、なにかフェーズ(局面)が変わったと感じ取り、判定できる場面がある。だがウイルスの広がり方やウイルス密度については、数値になって出てくるのは、2週間前の現実である。数値と現実感をそのつど対応させることは容易ではない。それでもこの極端な変動についてのデータは、2週間遅れの手掛かりではある。新規感染者の変動は、この2週間というタイムラグを経て、対応が決まっていく。2週間というのが、持続的な傾向を決めていくための手掛かりである。対応が決まれば、数週間で少しずつ変化は生まれてくる。それが眼に見えるかたちになるのは、4週間とか6週間ほど必要なのかもしれない。

マクロな変動には、その程度のスパンが必要である。全般的な傾向には、ある程度パターンが出現する。だがウイルスが変異し、異種株が出現して、局面を変えてしまう場合には、パターンはまったく別様となる可能性が高い。変化の度合いの変化(変化率)を感じ取る経験も典型的な強度性である。ただしこの変化率の感じ取りが、将来どのようなマクロ変動をもたらすかは、その場その場では知りようがない。長期的な見通しのためには、予測と物語が必要となる。

自然環境そのものの変化には、この長期的見通しの下での変化率の感じ取りが必要となる。地球温暖化のような数百年単位の変動のなかにも、フェーズが変わる局面が何度かある。そのフェーズを的確に感じ取り、つかんでいく訓練を行わなければ、長期予測とそこで出現する物語の羅列だけになってしまう。羅列される物語は、その物語の数に応じて、言葉が空回りし、現実感を失ってしまう。「そういうこともあるかもしれない」というフィクションに近い受け取りが行われる。生活の現実感と物語をつなぐ要になるのが、「強度性」である。

強度性の感じ取りから、どこにフェーズの変化の仕組みがあるのか、構想していくのが、生態学的なシステム・デザインである。地球温暖化は、地表面の近くで起きている現象である。長年地下に蓄えられてきた太陽光由来の石油や石炭を掘り出し、短期間に燃やしてしまうのだから、地表面近くのエネルギー代謝に極端な変化をもたらして続けた。このエネルギー代謝の仕組みを変えていくことは大切な課題である。地表面近くで起きる現象の中には、世界各国で起き続ける集中豪雨がある。2020年には中国南部で豪雨が続いた。地表近くの水の制御は、大きな課題である。このことにおそらく、

地中水分の保水率の減少が関与していると予想される。地表面全体が、いわば「砂漠化」しているのである。灌漑によって地下の水を汲みだし、草原を農地化して砂漠化し、国境内の水を資源として活用してきた。陸地の水分は、地底にあり眼に見えない現象である。そこに感度を働かせることは容易ではない。その容易ではない課題に取り組むことが、生態学的な「強度性」の感じ取りである。